

## 四句節を生きる心構え

### 「人はパンによらず、み言葉で生きる」

現代社会は便利で快適な生活が当たり前になっています。豊かになり、何かを我慢したり分け合ったりする体験が少なくなりました。だからこそ、キリスト者は社会の流れに逆らって犠牲を真剣に生きることを大切にしたいと思います。「犠牲の精神」は人間として成長するため、健全な社会を築くために不可欠です。世間では、犠牲は仕方なしに苦しみを受けることだと考えられています。しかし、犠牲とは神に捧げる『いけにえ』ことを指していました。神に感謝するため、神を敬うため、神にゆるしを願うために、自分からすすんで捧げるものでした。「犠牲」の漢字もそれを表わしています。「生きた牛を神に捧げることで私たちが『正しい者』つまり義（よし）とされる」と解釈できます。もう一歩進めれば、神を愛することでもあります。「仕方なしに、いやいや」と言った否定的な響きはありません。よい物を手放す時に心は痛みを覚えるものです。当時の財産だった牛や羊を手放すのは、大きな犠牲の精神が伴います。それは神を大切にする、尊敬するという「愛の証」なのです。だから犠牲は尊い行いになりました。

創世記に人類最初の「いけにえ」の話があります。農耕をしていたカインと牧畜していたアベルが神に捧げものをしました。兄のカインは余り物の収穫物を、弟のアベルは一番立派な羊を祭壇に捧げました。神は前者の犠牲を喜ばず、受け入れませんでした。後者の犠牲を喜んで受け入れました。このように、犠牲のための犠牲ではなく、神に感謝を込めて、敬意を込めて、それを形にしたものが犠牲です。人類最高の「いけにえ」はイエスの十字架です。牛や羊の血ではなく、イエス自身の命を捧げたからです。しかも自分から、私たちの身代わりになって、私たちへの愛のために苦しみを受け入れたのです。苦しみだけならイエスの両側の強盗も十字架に付けられましたが、それは犠牲でもなく、救いの力もありません。犠牲の値打ちは苦しみ自体にあるのではなく、それを捧げる人の心にあります。愛のために苦しみを捧げるから価値があるのです。

フランシスコ教皇は、この点を指摘して、注意を促しています。「神と和睦させてもらいなさい」。犠牲は神に立ち返る心を形にしたものです。神と和睦し、神にキズを癒してもらうことです。神を忘れ、神に背いた生き方は、人間と自分自身を傷つけます。不安、疑い、怒り、憎しみが生まれ、喜びと平安を失うのです。犠牲によって傷が癒され、喜びが戻ります。「喜びの根っこは十字架の形をしている」のです。■（文責：小寺神父）